高齢期における感情の個人内変動

信頼性と妥当性の検討

○中川威¹・小園麻里菜¹・権藤恭之¹

(¹大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード：感情，個人内変動，高齢期

Intraindividual Variability of Affect in Old Age

Takeshi NAKAGAWA¹, Marina KOZONO¹ and Yasuyuki GONDO¹

(¹Graduate School of Human Sciences, Osaka Univ.)

Key Words: Affect, Intraindividual Variability, Old Age

目 的

幸福感に関する研究では、回顧的な質問紙法ではなく、経験抽出法や日記法を用いることで、個人内変動を評価するアプローチがある。このアプローチを採る研究は、回顧的な評価と即時的な評価には不一致が見られることを指摘してきた。

一方、高齢期を対象にした研究は、主に回顧的な質問紙法を用い、加齢につれ肯定的感情は多く、否定的感情は少なくなるという結果を報告してきた。しかし、高齢者は若年者よりも肯定的感情を伴う情報を記憶することが知られており、日常生活で生じる即時的な肯定的感情は回顧的には過大評価される一方、否定的感情は過小評価されると考えられる。そこで本研究は、高齢期における感情の個人内変動を評価し、日記法を用いた測定法の信頼性と妥当性を検討した。

方 法

研究参加者および手続き 大阪大学、東京都健康長寿医療センター研究所、慶應義塾大学の共同実施による SONIC (Septuagenarians, Octogenarians, Nonagenarians Investigation with Centenarians)研究の第2波調査の参加者に、調査への協力を依頼した。調査参加者に調査票を配布し、1週間、毎日就寝前に回答するよう求めた。さらに、8日目に過去1週間の感情を尋ねた。調査終了後、郵送にて調査票を返却するよう依頼した。調査参加者 57名のうち、回答に不備が見られなかった 44名(82.91 ± 0.86 歳，女性 38.6%)を分析対象とした。

質問項目 各日の感情の測定には、PANAS-X(Watson & Clark, 1999)の日本語版のうち、肯定的感情(7項目)、否定的感情(7項目)、平穏感(3項目)、疲労感(4項目)を用い、1週間各日の気分を「1. 全く当てはまらない」から「6. 非常によく当てはまる」までの6件法で尋ねた。1週間の感情の測定には、感情的 well-being 尺度短縮版(中原, 2011)を用い、過去1週間の肯定的感情(3項目)と否定的感情(4項目)を「1. 全く感じなかった」から「5. いつも感じた」までの5件法で尋ねた。

結果および考察

各日の感情尺度の信頼性係数を算出した結果、肯定的感情($\alpha = .84-.94$)と否定的感情($\alpha = .77-.89$)は高い値を示し、平穏感($\alpha = .53-.78$)と疲労感($\alpha = .66-.76$)は中程度の値を示した。

次に、各日の感情尺度間の相関係数を算出した結果、肯定的感情と平穏感の相関($r = .60-.82$)は高い値を示し、否定的感情と疲労感の相関($r = .25-.63$)は中程度の値を示した。一方、肯定的感情と否定的感情の相関、平穏感と疲労感の相関はいずれも有意ではなかった。

さらに、7日間の感情尺度の級内相関係数を算出した結果、肯定的感情、否定的感情、平穏感、疲労感はいずれも高い値を示した($ICC = .95, .86, .92, .93$)。すなわち、日常生活での感情は比較的安定していることが示唆された。

7日間の感情尺度の個人内平均値と個人内標準偏差を算出し、それぞれ感情尺度の個人平均と変動の得点とした。各感情尺度の個人平均と変動の相関係数を算出した結果、肯定的

感情、否定的感情、平穏感、疲労感に関して、いずれも有意な相関はみられなかった。

続いて、感情尺度間の個人平均と変動の相関係数を算出した結果、肯定的感情と平穏感の個人平均の相関($r = .82, p < .001$)は高い値を示し、否定的感情と疲労感の個人平均の相関($r = .59, p < .001$)は中程度の値を示した。一方、肯定的感情と否定的感情の個人平均の相関、平穏感と疲労感の個人平均の相関はいずれも有意ではなかった。さらに、感情尺度間の変動の相関はいずれも有意であった($r = .31-.53$)。

最後に、回顧的な感情と各日の感情の関連を検討した。相関係数を算出した結果、回顧的な肯定的感情については、7日間の肯定的感情の個人平均、平穏感の個人平均、疲労感の個人平均との相関が有意であった($r = .59, .60, -.36$)。また、回顧的な否定的感情については、7日間の否定的感情の個人平均、疲労感の個人平均、否定的感情の変動、疲労感の変動との相関が有意であった($r = .44, .36, .49, .41$)。次いで、回顧的な感情を従属変数として、重回帰分析を行った。その際、回顧的な肯定的感情については、肯定的感情と平穏感に多重共線性が認められたため、一変数毎の検討を行った。その結果、肯定的感情もしくは平穏感の個人平均が高く、疲労感の個人平均が低いと、回顧的な肯定的感情は高いことが示唆された(Table 1)。また、否定的感情の変動が大きいと、回顧的な否定的感情が高いことが示唆された(Table 2)。

以上から、回顧的な肯定的感情と各日の肯定的感情の評価は比較的一致する一方、回顧的な否定的感情は感情の変動しやすさや測定期間中の出来事に影響されと考えられる。

引用文献

Watson & Clark (1999). The PANAS-X. University of Iowa.

中原純 (2011). 老年社会科学, 32(4), 434-442.

Table 1. 回顧的肯定的感情を従属変数とした回帰分析

	Model 1	Model 2
肯定的感情の個人平均	.54***	
平穏感の個人平均		.55***
疲労感の個人平均	-.26*	-.26*
R^2	.41	.42

* $p < .05$, *** $p < .001$

Table 2. 回顧的否定的感情を従属変数とした回帰分析

否定的感情の個人平均	.25
疲労感の個人平均	.12
否定的感情の変動	.32*
疲労感の変動	.17
R^2	.38

* $p < .05$